

# 妙安寺だより 323

テレフォン法話 092-751-6084 (毎週月曜日に話が変わります)

## 〔 葬儀の意義 〕

お釈迦さまの教えに「四馬の譬え」というのがあります。

これは、人の無常を思う心のありようを、四種の馬に譬えて示されたものです。

### 第一の馬は、のふりあげたの影を見ただけで走り出す馬。

遠い村や町で亡くなった人がいることを聞いて、それを自分の命の今日、明日の姿と受けとめ、「これはうかうかしてはおれない」と本気で人生に取り組む人のことを言います。

### 第二の馬は、鞭が毛に触れてから走り出す馬。

自分の村や町で亡くなった人がいるということを聞いて、自分の無常をり立ち上がる人。

### 第三の馬は、肉に触れてからようやく走り出す馬。

自分の親の死、親族の死を目の前にして、ようやく気付く人。

### 第四の馬は、にしないと走り出さない馬。

自分自身が死の床にし、お迎えの近いことを知って気付く人。

葬式の意味の一つは、の当たりにきし人の姿を見ることによって、忘れていた死を、無常の足音をごまかすことなく聞き、見据えることではないでしょうか。

「死ぬんだよ。あなた方も。この私のように。必ずその日がやってくる。しかも、いつやってくるかわからない。予告なしに。いつ死んでもよいように、毎日、毎時間を大切に生きなさい」

この一言を心のどん底から聞く、それが葬式の意義であり、毎日、毎時間を真剣に生きることが、亡き人への真の供養となります。

ほとんどの人は、いよいよ亡くなるときに未練や迷いを残し、生きているときにつくった罪のい、のために、うかばれぬ精霊となって死後の世界に生き、自分ために営まれる追善供養を受ける身となります。

亡くなった人は、いつも供養を受け、それを栄養として仏さまので暮らしていくのです。

自分勝手に熱心な信仰ではなく、法華経の教えに、自分自身を修養し、社会に実践し、生きているときに、すでに仏のようであることが求められています。

